

「吹流しと鯉幟」

(21)

古来から惟神の道に生きて来た日本人の祖先達が、自然の法則、自然の理をわきまえて、それを生活・風習のなかに生かしている数々の美風な宗教心に、まことに感歎これ久しくするのである。

五月となれば、男の児のある家々には、五色の吹流しと鯉幟を揚げて、五月の節句としてお祝いして来た。誰がこれを始めたかは知るよしもないが、その意義は深い。

春は萬物が芽を出し山も野も一面に緑鮮やかな風光をただよわせる。木の枝には花をつけ、草は頂きに花を開く、千紫萬紅といわれているが、五色の色であやどっている。この五色の色を與えているのは大空である。太陽の光線は、黄から緑を越えて空は青く、赤い太陽も東から昇って真昼は白一色となる。夕刻は逆のコースで夜は暗黒となる。大空は五色の活動体である。この五色に象かたどって古代の日本人は五色の幟を立て、また吹流しの色としたものである。五色は大空の理によって萬物に與えられる。大空から吹流されて降りて来る五色を地上に運んで、植物をはじめ、あらゆる物を色付け、味付けて成育をはかっている。この吹流しを立てると、近郷近在にも一層力強い色を現わし、大空の色を引寄せる媒介物・中継所となる。吹流しは幼児の成長を天に祈願している純朴な信仰心の象すがたなのである。この気持は天に通じ、吹流しの厚德は目には見えないけれども意義深い厚德のある行事である。日本では祝いの中の祝いと感じられる。

春になり生氣澆刺となった季節に、杉の木に耳を当てるならば、木と皮との間を音を立てて水を枝に揚げている事が判る。この澆刺とした生氣を象徴したものが鯉幟であることを靈界で観た。鯉の滝登りという説がある通り、春に萬物が水を揚げる勇ましい活動が滝の如き觀を呈している。滝を登るが如くにすくすくと幼児が成長する姿を形に現わして、祈願しているのが鯉幟を立てた趣意である。自然を表示したものであるから子供の祝いとなり、またその意義も深く、五色の真理で幟を揚げ、鯉の意気、大空の意気を受けて成長を祈願する神民の誠心の発露である。吹流しも鯉幟りも體的なものではなく、精神的を體的に表示して祝いとし、祭りとしたものである。女兒に対しての三月三日の雛祭りも同意義による祭事(真釣事)である。